

早稲田大学 グローバルCOE 「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」
調査研究支援スキーム 成果報告

所属 アジア太平洋研究科 学年 D6 氏名 平川幸子

日程 2007年11月4日 ~2007年11月9日

渡航地(国・都市名)

英国、ロンドン

リサーチ目的

Kew にあるナショナル・アーカイブにおいて、博士論文作成のための外交一次史料を探す。1950年代の英中関係、また英国と台湾の関係、淡水の英国領事館についての史料を求めている。

研究課題

博士論文、「二つの中国」ジレンマへの解決枠組み～「日本方式」の一般化過程の分析～執筆のため、各国の戦後対中政策の事例研究をしている。その中で、英中関係は重要な事例として扱う予定である。英国の1950年の中国承認の経緯については、先行研究で明らかになっている部分が多い。しかし、その内容は、英中二国間関係の交渉か、米国との対中関係調整のプロセスに焦点が当てられている。

一方、私の研究課題は、中国承認に伴う台湾との関係処理である。英国の場合、中国を承認しつつも、台湾の淡水の領事館を撤退しなかった。これは「二つの中国」への対処の仕方としては非常に特徴のある方式である。米国をはじめ、他の国家でこのような事例は見当たらない。この点について詳しく経緯を述べた先行研究が見当たらないため、一次史料を探しに英国のナショナル・アーカイブを訪れた。

成果

滞在日数が限られているので、事前にメールで登録や依頼を済ませておいたが、初めて訪れるアーカイブなので、勝手がわからない点も多く、また大規模改装工事中であり、一時的な保管場所に移動している史料も多く、ガイダンスや待ち時間に思ったよりも多くの時間を取られた。

50年代の史料は、ほとんどがマイクロフィルム化されている。課題テーマに関しては、いくつかの関連資料を見つけた。検索すると、淡水の領事館発の台湾情勢、軍事的レポートが多く見付き、その事実だけを見ても、この領事館がインテリジェンス基地として使われていることが推察される。

それらの史料はどれも興味深いのが、今回は限られた時間で、淡水の領事館残留の経緯を述べたものを見つけなければいけないと思い、国民党政府から共産党政府への政府承認切り替え

に伴う史料などを中心に検索と読解の作業を続けた。その点についての政策判断、戦略についての直接の描写を、Foreign Office だけではなく Cabinet Paper にまで範囲を広げて探した。

その結果、戦略そのものを明記したペーパーは見当たらなかったものの、領事館残留に伴う実務的なペーパーが多く見つかった。そこには英国政府の「建前」と公式対中政策の説明ノウハウが詳細に記されており、そこから逆に本音をうかがうことも可能かと思われる。全般的に、淡水の領事館残留については当然の権利であり、きわめて合理的に領事関係を維持していることがうかがわれる。中国からの反発があってもそれに屈する意思は全く感じられず、英国外交の伝統、プライドが感じられた。これは、博士論文の中で、英国と「二つの中国」の章で、重要な論点にできる史料だと判断した。この成果は、博士論文の執筆の形で表したい。

今回の現地アーカイブでの作業において、70年代のマレーシア、シンガポール（つまり旧英国領）及び ASEAN の動向についての外交史料も多く残っていることを発見したのは、望外の喜びであった。ASEAN 諸国の対中国交正常化については当該国に外交史料が存在せず、今までは新聞記事やインタビューを中心に検証作業を進めていたが、英国の外交史料によってかなりの内容が補強、あるいは新発掘できると思われる。70年代の史料については、30年ルールによってここ数年で公開されたものが多く、最新の研究成果として発表できるだろう。今回は時間の関係で 50年代の英中関係の史料に集中したが、必ず再訪しなければいけないと思った。

英国滞在中にブリストル大学のアマタフ・アチャリヤ教授を訪問し、博士論文や英国での史料調査についてのアドバイスをいただいた。次回、アーカイブで 70年代の史料を見るときには、マイクロフィルムではなく現物を出してくれるので、デジタルカメラで撮影許可されていると教えられる。これなら効率よく史料収集作業が進みそうである。今回は、初めての訪問で慣れないことも多かったが、今回はさらに大きな成果を携えて博士論文執筆に生かしたい。

事業推進担当者確認 (署名・押印)

メイン

サブ

*A 42 枚以内。各項目のスペースはご自由に変更下さい。